



中村俊定文庫
文庫 18
54
2



弓鹿集

崑山集

三

馬鹿集卷第三

崑山集友部之内



まも友に季もあまを此衣人
有瓶波ふ

春もなふ季あつや乃衣衣
とらあうは白はましるる
又別の作れ但たけ句あつる
ふとらひて衣ととらあつと
まも二つあうてあうりく
と

平定なるかきひさうらぬ
ひさうらぬ

お世せぬお世ぬさあ衣衣
とらう同意よや

秋草乃句よ

萩の町あせむらうはる杜若
とつらもゆり

扇よや折るはあどひんじい
扇子めりよ

何事も扇よりひん折句よ
とつらもゆり

後らう井よりきえみん杜若
伴務拙信よ葉平八橋霧旅

乃別をう井よりひの比よ
と

さうり共の目くいのそけ杜若
太子集親きりよ

花あれいもは目くかき
えき

とつらあせむらう又あまの
句よ

目くもあせむらうのうきめ
ともゆり

東海や道くきしなふ杜若
花野の句よ

わん井道きしらる花野
とつらもゆり

夕日影さすはあさやうあま
夕立の句よ

夕立のあさやうあま
とつらもゆり又あせむらう
句よ

朱さやう朴のあまあせむらう
句よ

と竹達し牛よさやの趣向め
つゝかき

月の島舟の下やうみつちやふ
有勢流よ

まのちのまのち名月やうらやう
とらうも作り

なとらふ森よまよれ後りふ
毛吹まよ

志きく神とまよきうらに林うふ
とらうとまよ

定家うらうらとみ楓らま後りふ
まうき鷲冠井良徳新宅の

今ほとありまよしてよとまよきく
うらうらとまよとまよ

家れを屋たしとありまよの
屋とみ定家うらうの後りふ

うらうらとみえと又定家うらを能
潜れ先達(まご)の屋うよらまよ

お月うらえまよ子種を古れまよ
くらうらとまよは思ひてさの

れ一ゆらまよありとたれ島
よまよ一て相白とる物入は

うらうらよけ他まよ
この紫れまよは定家うらう

まうき百人一首藤人の産よ
て苗産とありは趣向しえ妙

白とまよゆき苗産とる産
るれは作珠の津英後と云

傍のほろろその作くと怪よ
中絶る志くくつらきつらぬを
つれあふをまうしてよやゆらん
但ふと人と別くるれいじ
くふふふふふふふ

院籍うまれをみるあそき山樵

林道教柳のりよ

みるくに目を喜柳や院嗣宗

とつらも侍りけ他んも息を

こり

秀紙を風や通力本蓮花

毛吹草よ

新道して時志あや木蓮花

とつらも侍り

雪と同一宗旨う郭云

太子集よ

宗神の何のむきを郭云

とつらも侍り

ふれりそまう柳是と郭云

伊勢守武千句よ

るのりてや柳是の秋月

と侍り守武はは道乃先達之

先達の白とまうけていつえ

は道とまうじんやそ一又知て

あしきくくくくくくくくく

よ一を侍り

耳枕をくくくくくくくくく

太子集よ

かかりしとぬらふも入時鳥
又毛吹茅の舟

まふく月終るまふ時鳥
右三句なすくあつた筑波は
とめく水鷄よまふ時鳥

とめく水鷄よまふ時鳥

鳳凰の歌うる竟て郭云
鳳凰の歌うるのげくともきく
るめくともきくは他をいさうれ
すは事れあるもや然鳳凰の
竟の時代よわくふとまふれ
それとも鳳凰の歌うる業と
しつすいひくはらひけく
まふ昔黃帝創十二節以

聴鳳凰之鳴而別十二律其
雄鳴為六雌鳴亦六以比黃鐘
之宮云詳前流書よみ之
そり又或書軒轅候鳳鳴
調律ともつる志れハ鳳凰ハ
儀ふまふとんくもむきとを
うめをあるまふ

舟橋り名乗るまふよ時鳥
時鳥名れふゆもや又右一
右三句なり思へて名れる時鳥
右三句判はらひたれとも等
れふなる一

有めあつてあまきやれ時鳥
まめあつてあまの忠吟あふ

ありあけのほきさうくみし
とつらとつらとれううや宗源忠
句お

五明のつれあひまげよ時を
とりり又千六百毒芥合の時
後京極接治云

方明のはきれく廿月おぬ
山郭云まゝのあまうしに

ともしつれしてまのまらむとちり
明のはきえしとつらひあめし郭
れる明のつきえうくし事
ある何と事く思しとまや
ふりあをまふはく郭云

太子集よ

猿の向ととあつれくら郭云
とつら同さよや

も枕のひらや待よの郭云
一のの曲膝枕とさうとね
事ふしひらまうあふならぬ
郭云ぬゆとよのあしとこ
くひまうくまうくひまひよ
ひらああえきもあしひらあ
とつらまはりけかあひと
まふんさよ

一はさみぬのたつら郭云
とあ—のたつらとつら
れ又まぬまよ

又も新書類とてそのひゆれ
まのすくえ天地うこうせんと
なまうて天地うこうせんと
れいひひひひ

未実うして年切らう時鳥
郭ふいつくそもたすめ屋
ふくえすれ年きうせん事
ゆる右六のちた丸作

猿母まげぬ堂は庭のあふ
けうひひひ
堂更なる庭わけ猿のたひひ
とらもゆり又
まのすくえ庭を猿沃乃堂
とらもゆりひひひ

火柱うして年切らう時鳥
けうひひひ
火柱うして年切らう時鳥
とらもゆり
海うふ火柱をたふ堂
有る時鳥

稲妻に火柱をたふ堂
とらもゆり
櫛のちた堂もあれひひひ
友子集ふ
さのすくえ庭をたふひひひ
とらもゆり、是の櫛をたふ
う

西澤は庭うこうく飛堂

是やおろやれひくさたるん
ともありまゝハ二句さうけ
まゝとあらう

火とさるや堂れ中も不和の園
けあひひ

火とすする中やあしお花野
とりくもゆり又月のうき

さし羽と筆とあおのせあか
ともりく又もひまよ

飛ちるひなと火とすする野水
とりくもゆり

あふくはる影を堂れひくさ
けあひひ

こつは堂れ中も不和の園
とりくもゆり

夕立のうれ中よ
ゆあこらよひうら堂れ中も

とりくもゆり
とりくもゆり

とりくもゆり
とりくもゆり

とりくもゆり
とりくもゆり

とりくもゆり
とりくもゆり

とりくもゆり
とりくもゆり

とりくもゆり
とりくもゆり

又るけ屋の建つてゐる堂は
作者紀別無き人なり一
れは立仙言より一りけを
と明ればはよくはる堂
ともいふはあはれなり
又げ前部をけり

又るけ屋の建つてゐる堂は
作者紀別無き人なり一
れは立仙言より一りけを
と明ればはよくはる堂
ともいふはあはれなり
又げ前部をけり

又るけ屋の建つてゐる堂は
作者紀別無き人なり一
れは立仙言より一りけを
と明ればはよくはる堂
ともいふはあはれなり
又げ前部をけり

又るけ屋の建つてゐる堂は
作者紀別無き人なり一
れは立仙言より一りけを
と明ればはよくはる堂
ともいふはあはれなり
又げ前部をけり

又るけ屋の建つてゐる堂は
作者紀別無き人なり一
れは立仙言より一りけを
と明ればはよくはる堂
ともいふはあはれなり
又げ前部をけり

九堂れ白るるの暑夜のいと夏
えさきこととまらるるのれ神あつ
そこの涼しく静寂とて秋の
ちうきこと念たすこととあつ
小堂のむらさきとていづる
中さきこと静寂

夏中ふ火をたたくまふ花堂
あつこと静寂もあまうりよや又
な子集り

夏中ふ火の火とて花堂
とらふも静寂
猶ふ又らん昇中の堂は
けささひよ

猶えとてらん田中
の堂は
とらふも静寂

堂中やあつこと静寂
な子集り
夕まよあつこと静寂
とらふも静寂

あけ庭のみさくら堂
やより星
堂のみのゆるとして
考教と
秋庭のふさふさ
は静寂
くや

よりの星や堂く
やより星
一向は五通文祚の
庭くや
静寂
佛の静寂
な子集り

静寂の静寂
な子集り

とりくも侍連らあり

百草の黒焼まらり野の堂

堂の焼ともろくして黒焼まら

もあつ又野の堂もつらよ

松屋幸順あり

時らつれ芝焼まらり堂の火

とりくも改めもろく

ぬすみつらする草蒲に花堂

一舟の心志屋うぶそめの上と又

かき入つらそのれ他一舟乃

内らあつしふら入つらよ

おもと家又草蒲のあり

水々ありふら入つら草蒲が

とりくも侍ら

周の迷逢めらり堂や火の車

けりしひ子

くらくともあつら堂や火の車

とりくも侍ら

あつら草蒲にやらん田の堂

うらまもい草蒲にこつらあつら

わたのもつらつらあつら

西の堂花のあみこのまら

夜半花は月のあり

西へ月をあみこのまら

とりくもあつらつら十一舟の

長丸地へ

珠のるまにあつらあつらの数株が

苗亦行惠と云人のあり

夜も涼蚊より吐きあふ蝶の糸
とつる長衣丸長息けしうら
はさる先地さん

けうんか 桂あや井戸の車百合
けうんかあゆむらさきあまのこ
こひまきののこしん 中よや

森茂ぬきやゆりあつたん
むらけは庭のあまこころねもた
地えんと呪まじしあまのまてを

あまのこあひまめしんくしん
侍まじりあまやあまをさるくお
ゆふあつた花の家をさ

こゝろなる海木曾殿の本学乃車百合
平家物語の本学乃車百合の
別車よりあつたはらるるよ

ていなり 太二句長衣丸他
あまのこあひまめしんくしん
あまのこあひまめしんくしん

揚も地とあまのこあひまめしん
とつる長衣丸長息けしうら

細とうね花の賢女や善人弟
史記通鑑あまのこあまのこ忠臣不事
二君貞女不更二夫とことみ

侍連りしてひもさあつた賢
女さるるあまのこあひまめしん
さるるあまのこあひまめしん

さるるあまのこあひまめしん

わき又た子集難秋乃句女

とくふぬ初め松の木は自安に

とつるハむ久々ぬとつる付

女よわ

孫子とつるけるぬれあやこか

替る紙波の母

孫子とつるけるぬれあやこか

とつるも侍り

孫子とつるけるぬれあやこか

た子集よ

うらめしき若葉もみくはう鬼あ

とつるも侍り

孫子とつるけるぬれあやこか

毛吹草よ

竹の子あやどめつるお首まわり

とつるも侍り

石の竹やとつる月の花さうり

惟子れりや

かたひつひあや月のかいありか

とつるも侍り

あやうもかき葉のささい

毛吹草よ

かたひつひあや月のかいありか

とつるも侍り

かたひつひあや月のかいありか

とつるも侍り

かたひつひあや月のかいありか

とつるも侍り

毛吹草より以前よおそれい
ひいても強ちひまきてもはなふ
ますのういゆえ莫多能指よ
ておひ前のういその脇ハ

うれちと給ふまあつけの四
とつけて三藐院後清兵衛
別奥よは相奇まけおれま
れくれまき百劫之志うれも
毛吹草の再あそく入れいせん
うまあーさうふううまぬふ
とせし紙ーい古うあそよは
ううまあそみうううまうま
ーしーしー一字二字とらふ
ら等おの教とまーと一字も

ううううそのまーいされら
うおの 従後うれぬま
も傳受あうまやれとほま
りーま子まのまーれん
ううまー

志う海とらるる早れ河の類
瓜のうよ

白えし月 瓜とすすひてら
とらう回ま

まー病ハ竹のまーれら
苗水舞下のうよ

竹の子れあまれら病ハ
とらうはまはまのうえれ
まみらう

朝の妻あやめの家あやめは
及子集親きわぬ

さる娘やうふ柳のさる
といふとあやめり

花はたそさるや積も昔蒲草
うさうぬらうとて飯のふも

よけもははらう人のふさ人
えり

武家ぶらうまらあやめ朝の妻
永舞うま

あやめひげの流うまはは
といふとあやめ

朝の妻もさへみよ昔蒲草衣
うさ衣の友さうまのさ物

あはと又海氏物うまは未原

むのふさうま衣さうまを
海氏さうまのゆさうま

あはと又海氏物うまは未原
朝の妻もさへみよ昔蒲草衣

これ親もさうまのさあ
まやあうまは未原

とあはと輕表とい名別のあ
あは

絶は絶てんを先とく粉

長乃他ははあまは未原
俗人うまは未原

といふもゆうまは未原
和子と云人紙のうま

あつたを

牛乳でも夏の秋味めめこの
長丸のうさぎをうさぎのつれは
うのちししきよめれ麻子うり
おの越向めめ

かきくささめのかきくさし
驚き驚きよ

なまもふささめめめめめめめ
とつらもつら

短衣お孫ころう人お猫の
猫お秋味ころうおふあは

なれおやあさお葉地の前
なれおやあさお葉地の前

このお夏の秋れあつた
いふふお仕きころうお

小林守好
秋のおやあさお葉地の前

秋のおやあさお葉地の前
ともいふく秋の秋れ明き

かきめもたつら
何家えめめ衣きこせめめ

くさ衣ハ出家の衣れま
らん

猛あつたあつたあつた
淮南子云免絲無根而生蛇

無足而行莫無年而聽
無口而鳴まきまきまき

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

まじいおめめ

とのおめめ字と読するお蝶の字
蝶の字れおしせんく蝶の鳴
くおれせんくしとせんくおめめ
御方のありしをすしあさる
おしをれ

お金おきれなすお蝶外
永舞おめめ

一おりの夕立きぬて
といふおめめおめ

せんめんおめめおたの二
お蝶おはよ

せんたんおめめおたの二
といふおめめおめ

暑き日おきれたさるおめめ

おめめおしおきおしおし

くろくお蝶院の藤光のこ

しとくお蝶おめめおめ

るしとくお蝶おめめおめ

おしおしおしおしおし

おしおしおしおしおし

西へおしおしおし

暑きお蝶の字おめめおめ
けお一おしおしおし

おしおしおしおしおし

おしおしおしおしおし

おしおしおしおしおし

おしおしおしおしおし

りる志二白もたれ他く
なまきこころひく雪うすの山
なまきこころひく雪うすれ嶽
二白さうらゝ雜草の可よ入さう
こしめめめめめめめめめめめ
白の他も山崎安之とありつらね
なまきさうらゝん他山と嶽との
めさうこそ等路のり進めん

